

# 下田歌子の學習院女子部長辭職（二）

——和田豊宛書簡と辞表草稿——  
下田歌子研究（五）

大 井 三 代 子

はじめに——辭職についての世評

下田歌子が學習院女子部長を辭職したのは明治四十（一九〇七）年十一月二十八日のことであつた。この出来事を、『婦女新聞』は三百九十五号（明治四十年十二月二日）の社説『下田女史の辭職』（一頁）、『下田女史の辭職と世評』（三頁）と二ページを割いて大きく取り上げた。「婦女新聞」は明治三十三（一九〇〇）年五月十日に福島四郎によつて創刊された新聞である。その名が示すとおり「男女が人格的に対等である意義を明らかにし、女子の能力を自由に發揮せしめるため、教育職業及政治經濟上の機会均等を主張する」ことを趣旨に、女性に関する問題——公娼廃止・母性

保護・女子教育・婦人参政權など女性に関するなどをとりあげ報道し論じたものである。

『下田女史の辭職』では歌子が十一月二十六日に辭表を提出し、同月二十八日に御裁可があつたこと、歌子の後任は山口高等商業学校長松本源太郎が任命されたことを書いてゐる。歌子の業績は貴族の女子教育の基礎を確立したことである。辭職の理由は、来年度の予算編成も終わったのを機会に辭職し、文学の研究をするという希望によるものとしてゐる。しかし、この理由は表面のことであり、裏面では學習院長乃木希典と意見が合わなかつたことは確かなる事実であり、強大なる圧迫が加えられ、部長の職權を自由に行うことができなくなつたことは想像できる。争うこ

とは教育界にとつて慶事ではなく一身の利益にもならないので、平和の裡に終局しようという考えがあったと歌子の心中を推測している。「婦女新聞」の記事は歌子に同情的といえる。

『下田女史の辭職と世評』では「下田歌子女史の學習院女學部長辭職ほど近來の新聞紙を賑はしたる事件はあらず」と書き、各新聞紙の論評を集めて紹介した。それを参照すると、歌子の辭職に各紙がどのような感想を持ったかを知ることができる。「国民新聞」、「日本」、「中外商業新報」、「都新聞」は辭職は問題ない。「東亜新報」は乃木に対する批判、「中央新聞」、「東京二六新聞」は、今後の女子部の生徒減少の問題に留意すべきと意見を述べている。「やまと新聞」、「大阪毎日新聞」は乃木院長との対立とし、「時事新報」は部長の権限を行使できないことにあるとした。

「婦女新聞」で取り上げられていない他の新聞、「東京日日新聞」十一月二十五日の記事では、辭職の理由を乃木との意見の対立としている。また十一月二十五日の記事では、ゴルドン夫人が来日して、東洋で新聞事業を起こしたいと下田に相談をしたところ、歌子は時が来たと辭職を決心したと書き、下田がその事業に参画する意思があるかのように書いている。『報知新聞』はこの件について真実の一端を報道したいとし、華族女學校が學習院女子部に組織変更

がされてからの動きを丹念に取材し、辭職前に乃木や教員に取材をしている。また辭職後の下田に面会し取材の記事を掲載している。新聞報道では、辭職という事実とその理由を書いているが、当人に直接取材したのではなく、世間の噂や記者の憶測で書かれたものと考える。

本稿で取り上げる和田豊宛の下田歌子書簡（個人所蔵）は、歌子の辭職に関係するもので新資料である。筆者はこの書簡を拝読する機会を得て、書簡の翻刻と紹介をする許可をいただいた。書簡の内容と辭職に関係する資料を参照しながら考察したい。

### 和田豊宛書簡について

ここに取り上げる和田豊宛の下田歌子書簡は、歌子の辭職に至る経過の一端を示すものである。まず書簡の書誌と翻刻を記す。（巻末図版参照）

#### 【書誌】

形態 台紙に書簡を貼付。他の資料と共に巻物に仕立てられていたもの。

寸法 書簡料紙 縦一七・二cm 横一七七・六cm  
台紙 縦二二・五cm 横一七七・六cm

行数 墨書 七一行

その他 日付の横に、「明治三九」と書き込みがある。  
書込み者は不明。

【翻刻】

前略御ゆるし被下候先達而中ハ  
恩給の件にて非常に心配  
致し候結果やうく本省と他省  
との聯接相つき実に安心  
と存居候所貴縣知事殊の  
外貴下を御愛惜の由故ニても  
期日は後れ候事故知事上京  
を待ち私より御懇談申上候方  
可然との議にて右の如き搬びに  
致し候ひしが知事ハ飽く迄も  
貴下を貴縣ニ御止め被成度  
旨比上は貴下眞意のある所  
御決心の如何によりて相決し候  
より外無之と愚考致し候  
そは知事の御詞の中ニ今一應  
貴下の御考へを確か（め）度と相  
感じ候義も有之かたゞ更に

此書をさし上候次第に御座候  
貳回申候ても私ハどこ迄も  
貴下を御歡迎申度心事は  
終始一貫ニ候へ共官途の常  
己れ自身すら未来の事は  
わかり不申極端ニ申せバ  
明日の事も不定といハねば  
ならぬ次第ニ候ふを貴下には  
知事のかく迄御抑留被成候  
情誼に對し誠ニ忍び難くハ  
あれど一旦当方にも約束  
相成りし故勢ひもたし難  
けれバとて当地への御轉任を約  
義ならせしも心愛する等ニも  
有之候覺にハ御就任の上に萬  
一にも貴下の縁期ニ反したる  
事等ありてかゝる事ならん  
には寧ろ懇望せられ候たる其  
御地ニ御止まり相成候方可然何  
ものニもとやうの事も存しまし候様  
に一たひ斯道の為却而不  
得策と被存候俟今一應御高

案願ハしく候然れ共萬一

一たび決心したる事なれば

よし知事の抑留ありとも断じ

て轉任致すべく且又新就

職の前途有望也と尊意

愉快ニ御す、みニ候様ならバ私

ニとりても極めて愉快ニ相感じ

可申候申す迄も無く教育の

衝ニ當る者は乃ち人をつくる

の重任を負ひ候なれバ飽く迄

も打ち隠し無く正心誠意

を以てして爾も銳意執心

其職ニ尽瘁するの覺悟なら

ざればいかなる良器なりとも

存外ニ續のあがる所少なかる

べしと被存候間何卒豪も御斟

酌無く貴意のありの俣を御咄し

被下候はゞ幸甚ニ御座候実は

主事は男子部ニ一名女子

部ニ一名ニて所謂一役一人

故欠員なるハ極めて困難ニ

候へ共希くハ貴下を御待ち

申度と存じ「主事心得」等も有候す

御次第ニ御座候貴下御決心

如何を奥底無く承り候上ニて

何とも工夫可申候間折

返しの御返事待人候

勿々かしく

四月廿九日

下田歌子

和田豊様

御下

書簡の主な内容は、和田豊の新就職―歌子の辞職後に後任として就任する意思があるかどうか確認したく返書等待つというものである。兵庫県知事の服部一三は和田を慰留する気持ち強く、歌子との懇談の結果和田の意思により決定することになったためであった。

当時の兵庫県知事は服部一三（一八五一―一九二九）で、在任期間は明治三十三年十月から大正五年四月である。岡田五鬼は「兵庫県御影師範学校創立六十周年記念誌」の中で、「當時本縣には服部一三と云ふ明府が長くその職にあつて大に力を一般縣治に注がれ就中教育に關しては特別の理解があつたといふことである服部明府は眞に良二千石

であつて人に任すること厚く和田校長の言も殆ど聴かれざることなかつた様である。是を以て本校にも臨時突発事件があつても和田校長の地位には豪も動揺がなかつたのである。」と述べている突発事故とは御影師範学校の火災のことである。服部一三の和田に対する信頼の深さをうかがわせる。

文中に「知事のかく込御抑留被成候／情誼に對し誠<sub>二</sub>忍び難くハ／あれど一旦当方にも約束相成りし故」とあるので、和田はすでに歌子の後任についての打診に了承の旨を伝えていたことが知られる。「実は／主事は男子部に一名女子／部に一名にて所謂一役一人／故欠員なるハ極めて困難」と學習院の組織について記し、この話は減多にない機会であることを強調している。「私ハどこ迄も／貴下を御歡迎申度心事は／終始一貫に候」と述べ、和田が来ることを強く望んでいることを書いた。何としても和田を得たいと望んでいる歌子の熱望ぶりがうかがえる。その一方で「己れ自身すら未来の事は／わかり不申極端ニ申せば／明日の事も不定といハねば／ならぬ次第に候ふ」と人事の難しさを覗かせている。

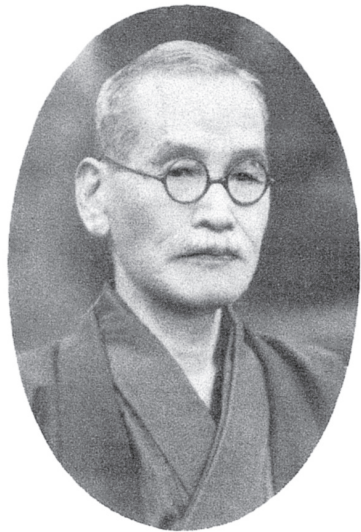
「婦女新聞」で報道しているが、歌子の後任は松本源太郎と決定された。兵庫県知事の強い遺留に留まることにしたのかは不明である。松本源太郎（一八五〇—一九二五）

は東京帝大文科大学専科卒業、一高教授となり、明治二十六（一八九三）年東京高等師範学校を兼任した。明治三十二（一八九九）年五高教授、明治三十三年山口高校校長に就任した。學習院女學部長を辞職後は宮中顧問官となった。

### 和田豊について

和田豊（一八六四年三月—一九四〇年九月）は、師範学校の教育に携わり、「鎮撫校長」といわれ、校長として教育界では有名であった。和田豊とはどういう人物であつたのか。彼の人柄等については『羽田貞義先生追悼録』と『兵庫御影師範学校創立六十周年記念誌』に見ることができ

る。新潟師範学校の校名は、初めは新潟縣尋常師範学校と称したが、明治三十一（一八九八）年に新潟縣第一師範学校、明治三十四年に新潟師範学校と改称した。和田は明治三十七年二月までの五年十か月を校長として管理運営を行った。和田が校長として在任していた時の教頭は羽田貞義である。『羽田貞義先生追悼録』を参照すると、新潟師範学校は全国的に有名な騒動学校であり、明治三十一年四月に和田が就任するまでに宗教事件（明治三十年八月）、



和田豊肖像

（「兵庫県御影師範学校  
創立六十周年記念誌」収載）

学校長留任運動（明治三十年十二月）、演劇事件（明治三十一年二月）があり、校長も短期間で交代するという状況であった。このため全国から手腕徳望のある諸先生を物色し、「鎮撫校長の名を専らにせる和田校長」と「温顔玉の如き徳望の羽田教頭」を据えることになった。

和田が校長の時には腸チフス事件（明治三十二年一月）があった。腸チフス事件とは寄宿生の中に腸チフスに罹患した者がいて、それが寄宿生に伝染し高熱を出す者などがでた。保学校医の指導で寄宿生は全員外出禁止となった。長期にわたる外出禁止で生徒の不満は大きくなり、本科二、三年生及び簡易科の三学級七十余名が夜に寄宿舎を脱出して近くの旅館に移動した。この行動を起こした生徒一同に

は無期停学という厳しい処分が下された。六ヶ月後に停学は解かれ、十一月には福島への行軍旅行した結果、生徒は母校愛に燃えるようになり、鎮撫工作が成功したと書いている。『大漢和辞典』の編纂者である諸橋轍次も新潟師範学校の卒業生で、追悼文の中で「懇篤円満なる（羽田貞義）先生の得風は厳数崇高なる和田先生の威望と相配して」と二人の人物を表現している。

次に赴任したのは兵庫県御影師範学校である。『兵庫縣御影師範學校創立六十周年記念誌』によれば、兵庫県御影師範学校は明治七（一八七四）年に設立された教員伝習所を始めとされる。和田は校長として明治三十七（一九〇四）年二月から大正十（一九二一）年五月まで校長として就任していた。在任期間十八年間と長く、その間教頭の「師聖」といわれた岡田五鬼と学校経営に当たった。卒業生の一人は和田を「嚴父」、岡田を「慈母」と表現している。御影師範学校は運動が盛んで、自由で放任、ずいぶん気ままできたという。和田が校長として着任すると、学校の空気が引き締まった。和田は運動だけに偏ることを戒め、試験が多くあり、成績が悪いと学期末に忠告があり、忠告が度重なると落第、退学、簡易科に移るという処置がとられた。「実力のない教育者は廢物だ、口先の教育者に非常時局を託することは出来ぬ。飽くまで鍛錬一路で精進するのだ」



として運動と考査を行った。御影師範学校時代の和田は、全国師範学校中の校長として仰がれる存在であつたと記している。明治三十九年に卒業した生徒の時は、七十余名入学、完全に卒業したのは四十二名である。

岡田は記念誌の「第十二章 本校に關する描寫」の中で「和田校長」と一節を設けて和田の人柄や行動などを書いてゐる。御影師範学校では明治四十（一九〇七）年十二月に寄宿舎が全焼するという事件が起きた。和田は善後策を講じただけではなく、新寄宿舎の設計をしている。岡田と卒業生の描く和田は学校経営に長けて、教育の方針は文武の両立である。學習院の組織が男子部と女子部に分かれるという組織改編が行われ、歌子が女子部の運営に苦慮することが多かったことは想像に難くない。歌子が、学校運営に優れた和田豊という人物を自身の後任に臨んだ理由はこのあたりにあつたと思われる。

和田は學習院に就職することはなく、御影師範学校で長く校長職を務めた。退職後に兵庫県の親和女學校の二代目校長となる。親和女學校の校祖である友國晴子（一八五八一—一九二三年）は、女子教育の先覚者として知られる人で、十月二十六日に逝去し、二代目校長となつた和田は友國の追弔会を提案し三年後に開催された。友國の命日をもつて校祖記念日と定め、友國の偉業と遺徳とを景仰する機會を

興へた。追弔会で歌われる「校祖記念日の歌」の歌詞は和田の作詞によるもので、友國の生き方と人柄を表現している。和田の人柄を記したのを見ると、人を尊重し、知識を学び健康な身体の育成の努力を学生に求めたように思える。厳父と評された和田だが、生徒の将来を思い慈しむ心の深さと思う。

### 辞意の表明——乃木希典宛書簡の草稿

明治四十年四月に學習院長乃木希典に宛てた書簡の草稿が実践女子大学短期大学図書館の下田歌子関係資料に所蔵されている。學習院女子部の名入りの野紙に毛筆で書かれたものである（資料番号六十五）。次にこの草稿の全文を翻刻して記す。

#### 不肖歌子

謹而男爵乃木學習院長閣下<sup>ニ</sup>白須歌子幕末<sup>ニ</sup>一小藩士の女と生れて幼時忝なく後宮<sup>ニ</sup>奉事し濫り<sup>ニ</sup>兩陛下の殊遇を蒙り亟で

皇后陛下華族女學校御創設の議<sup>ニ</sup>預り校則を草し教鞭を執り爾來爰<sup>ニ</sup>二教育の衝

ニ当るもの甘有三年常に戦々競々として其

職<sup>ニ</sup>耐へざらん事を懼れ夙夜其勢<sup>ニ</sup>怠らん事を

求め

恐れて敢て一たびも陥落の日を選びし事無し而して歌子不徳の致す所夙にハ骨肉の産を失

ひて家累を不肖<sup>ニ</sup>及ぼす事あり今や（削除）客春また

校の宿弊を去り不能を退け陰<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>異教に

迷信し至尊を無之するの徒を逐ひて却て陽に

敵を衆康<sup>ニ</sup>求む況んや華族紳縉の輩は

皆歌子が草奔より出で、其女兒を慎戒し豪

も貴顕<sup>ニ</sup>下らざるの不遜を惡まる、を知る今

や外教の大<sup>ニ</sup>氣焰を上げ社會黨輩の盛に

官党否尊皇党を傷くるの秋<sup>ニ</sup>際會し先<sup>ッ</sup>

其毒刃<sup>ニ</sup>羅れり歌子もとより君国の為<sup>ニ</sup>一死以

て報いんとす無実無根の攻撃の如きハ勿論更に

介意する所<sup>ニ</sup>非ず猶進んで公けの誤解するが如

き<sup>ニ</sup>至らば神聖なる法廷<sup>ニ</sup>其曲直を争はんのみ

然れ共歌子匪徳<sup>ニ</sup>して既にあらゆる世の惡徳の名

を以て冠せらるるも損失の及ぶ所引て校名を汚さん事を恐る

宜しく現職を退きて後進の豎を

虐ぐるの據れる<sup>ニ</sup>ハしかし幸ひ<sup>ニ</sup>閣下の高徳明智上<sup>ニ</sup>在るあ

り

歌子退きて一の遺憾無し希くハ衆望を負ひて

上流女子教育の大成を期し給はん事を歌子不敬を以て創業の際より今日<sup>ニ</sup>至る梗勢<sup>ニ</sup>於て或ひは

閣下の無考に資することもあるべし誠々<sup>ニ</sup>前途の目的と職員<sup>（五）</sup>の得失を具して左右<sup>ニ</sup>奉る願くは

園田御用掛と共に御一考を煩ハさん事を

蓋し歌子ハわが帝国の上流子女教育及び教師

待遇俾<sup>ニ</sup>於ける萬<sup>ニ</sup>卑見ありもとより其実行

ハ不可能の事<sup>ニ</sup>属すべしと雖も歌子既<sup>ニ</sup>之を口

にす先づ隗より始めざる可らずとも亦歌子が情

冠の意を促すの一機會とす而して歌子<sup>ハ</sup>辞表

の御採可と共に畏<sup>ニ</sup>けれ共徳配を返上し恩給を辞

返し単身一布衣となりて陽に外教不法の徒と

戦ひ非皇国迄を社會党と闘ひ傷きて以て

斃れん事其準備として暫く異郷<sup>ニ</sup>あり還りて

すべきを期す

而して後素志の決行を為さんとす（削除）歌子五尺の體

軀小なりと雖も旌旗を靡して正義を叫びこの口実相反し正

躰是れ欠く現

今の剛腹漢をして或ひ<sup>ハ</sup>多少戰慄せしむ

るの機とならん乎閣下幸ひ<sup>ニ</sup>歌子が微意の

ある所を賢察ありて其杞憂の萬一をも酌取

あらせ給ハハ本懷に耐へず

誠惶謹白



明治四十年四月

陸軍大将兼學習院長男爵乃木希典殿

閣下

草稿には、歌子の辞意の表明と決意が書かれている。華族の間では歌子が乃木院長に対して不遜であるといい、非難や憎しみがひろがっていることを知った。「社會黨輩の盛に／官党否尊皇党を傷くるの秋<sup>ニ</sup>際會し先ッ／其毒刃<sup>ニ</sup>羅れり」とあるのは日刊「平民新聞」に掲載された『妖婦下田歌子』という連載記事のことで、歌子だけではなく伊藤博文、山縣有朋、土方久元等もその俎上に上がった。この事態に校名を汚すことを恐れて退職する決意をした。一人になって自分を中傷してきた外教の徒と社會黨の輩と闘い斃れる所存であると心中を述べている。

日刊「平民新聞」の記事が明治四十年二月二十四日から連載で、この草稿も明治四十年四月付である。先に紹介した和田豊宛書簡の内容は歌子の後任人事に関するものなので、これも明治四十年四月のものである。和田豊宛書簡の中に、「一旦当方にも約束相成りし故」とあるので、四月二十四日以前に女子部長就任を打診し、了承するという返書を受け取っていると考えられる。乃木院長に宛てた書簡の草稿は四月上旬に書かれたものと推測する。

## 辞職の発端―華族女學校の改革

歌子はなぜ辞職するに至ったのか。乃木院長宛の書状の草稿では、歌子に対する誹謗中傷が激しく校名を汚すことを恐れたことを理由としている。歌子は、辞表の草稿が書かれてから八か月後に辞表を提出している。事の発端と辞表提出までの間に何があつたのだろうか。

『下田歌子先生傳』には『余が辞職の顛末』と題する手記があり、辞職に至るまでの経緯が記されている。この手記の掲載は前半冒頭の一部のみである。一部に止めたのは、当時の関係者に対して多少の憚りがある点を顧慮したためと伝記の編纂者は説明している。

手記は、事の発端が華族女學校が學習院に併合され學習院女子部になるという通達を受けたことから始まっている。この通達の件は、「報知新聞」が明治三十九年四月十六日の記事『華族女學校廢合の真相』で取り上げ記事にしている。「報知新聞」の一連の關係記事を参照しながら『余が辞職の顛末』を読んでみたい。以下長文ではあるが引用する。

余は一昨年明治三十九年の三月下旬俄に華族女學校を併合して、學習院女學部と成させ給はん 聖旨の由

を田中宮相より達せられ、且、これこれしかじかの理由を草すべき旨を傳へられぬ。而して内部改革を要すべき點をも示されたり。決議には渡邊内蔵頭の参すること多かりき。

余始めは其の合併の不可を具術せしが、聖旨既に定まれりとの事なりしかば、又如何ともすること能はず。廢官すべき各教師の過失も、亦争ふ可らざる事のみなりしかば、決然改革の衝に當るべき旨を誓ひ、最も公平に極めて綿密に事を處理して且曰く凡そ舊弊を去つて新空氣を入れんには、短くも満三年の歲月を要す。別に完結を要せば、寧ろ十年ならんのみ。而して快刀を執る者は、必ず攻撃の矢丸を受くるの覚悟無かる可らず。攻撃の矢丸、不肖はそれ能く之に耐へん。然れ共、爲に當局者諸公の之に動き給ふ事あらば如何と。宮相曰く、君の事はすでに百万攻撃を聞き、其實、之を具昧的に調査したる事ありき。而して君の言動の青天白日なるを證しき。最早、我輩には一點の疑ふべき餘地無し。今後いかなる誹謗讒口あるも、我輩當局にある間は、決して決して心を勞すること勿れと。余爰に於いて、今、自ら去らば、校の前途極めて悲觀なすべきを思ひ、遂に 聖旨を奉じて、改革の衝に當りたりき。

「報知新聞」は、明治三十九年四月十六日の記事、『華族女學校廃合の真相』で発端というべき出来事を書いている。それによれば、三月二十七日、細川潤次郎校長に宮内省に出頭の命令があり、出省すると田中宮相（宮内大臣）から華族女學校の組織變更について懇談があった。その要旨は、學習院が大学部を廢して中学程度の組織に改正、華族女學校もこれと釣り合いを保つために改革を加えるべきである。男子の教育が中学程度ならば女子の教育は小学程度がふさわしいと思うがどうかというものであった。これに対して細川校長は田中宮相の説のとおりに改正すれば、上流の賢母良妻を養成する目的は達せられないと返答した。華族女學校を學習院に併合することは奏上し裁可を得ているので變更はできない。小学程度の教育に改正することは細川校長の意図することもあるので、何とか適當の処置をとるという内容であった。翌二十八日に下田歌子に出頭の命令があり、校長と同様の懇談があり、下田も校長と同様の返答をした。この記事によると、手記の三月下旬とは三月二十八日である。

翌日には『華族女學校廃合の真相（續）』として、小見出し「幹事の憂慮」、「調査会を設く」、「開校の延期」に分けて記事を掲載した。「幹事の憂慮」では、細川校長と田中宮相の懇談は秘密にされたが、幹事浅岡一が知るところ

となり、實際上の所見意向を上申することを申し出た。細川は校長としての意見は十分に述べたとし、浅岡一や諸教授を諭した。「調査会を設く」では、學習院と華族女學校の合併組織等について協議するために調査会が設置された。この調査会には細川校長、華族女學校の主な教授は参加せず、山口銳之助學習院長、下田歌子、某宮内官吏との三名で蜜蜜に協議されたという。手記を参照すると、某宮内官吏とは渡辺千秋のことである。調査会での協議の結果、華族女學校の課程は、最初小学校程度に引き下げるという議であったが、従前同様となり、更に専修科を設けることになった。この専修科は一つの特色として見るべきもので、これは下田の尽力によるべきものであると記している。

『華族女學校廃合の真相』では「官制改革自然の結果として細川華族女學校長并浅岡幹事以下教授助教書記等四十餘名の罷免」が行われたと書いているが、『女子學習院五十年史』の旧職員名簿を参照すると四月の退職者の内訳は、校長、教授、助教、書記は二十二名、家政科授業囑託、雇教師は三名、合計二十五名である。手記では「廃官すべき各教師の過失も、亦争ふ可らざる事」とあるので、このことはすでに決定されていたことである。「開校の延期」では、免官の辞令交付が教員数の大幅な減少となり、四月十一日に開校予定ができず、十八日に延期となった。改革

の一端であるこの免官の措置が、下田に対立するものを排斥し、華族の女子教育を自己の手に握ろうとする意図があると評する者が出てきたことを書いている。

改革に着手した歌子は、予測していたように攻撃を受けることになった。そのことを『余が辞職の顛末』では次のように書いている。

爾来殆ど二年間銳意熱心、百事を抛ちて、女學部改革後の新事業に身をも心をも盡したりしに、計らざりき、廢官の徒十數名、黨をたて、朋を集め、或ひは新聞紙に余が誹謗を載せ、或ひは生徒、及び生徒の父兄に直接に間接に、余が事を惡ざまに言ひなし、殆ど日として右等の件を耳にせざる事無きほどの妨害を加へられしも、余一つの辯解もなさず、一つの抵抗も試みず、詮ずる所は、ただ 聖旨を奉じて盡す所の部内の改善進歩にのみ盡瘁したりし結果、先は、生徒も父兄も漸次其改善進歩を悦ぶの聲を漏らすに至れり。今滿一年を経過せば、將に小成を告ぐべきを期したりき。

改革に着手して、歌子は希望していた専攻科を設けた。学科の程度を高くして科目は文学科と技藝科で、両方家政學を入れ、学科の程度を高くしたものである。また學習

院女學部の学制と幼稚園幼児の衣服について定め、明治四十年九月十一日より改良実行した。

一度に多くの教職員を罷免した結果、彼らや華族の間に歌子に対して反発や非難の声があがったのは予測していたことであつた。「読売新聞」明治三十九年五月十日の記事「元華族女學校職員と下田歌子女史」ではその様子を書いている。「一部の華族社会にはどういふものやら苦情を唱ふる者あり或ひは廃官なりし元華族女學校教官の首唱にて私立の華族女學校を創立せんと企て内々密議を凝す模様もある由」、また「此程常盤會員中の有志者某々貴夫人等数數十名發起となり細川前校長を始め廃官となりし教職員を華族會館に招待して盛なる慰勞会を開きしに一昨日又細川前校長に代りて新に學習院女學部長となりし下田歌子女史が會主となり矢張細川前校長及元教職員を廻町なる寶亭に招き年來の勞に報ひんとせしが細川前校長其他一同申し合せたる如く其出席を断り中には案内状を其ま、突返したるもあり」と歌子に対する反発の様子を報じ、裏面には種々憶測の風説があると書いている。

「報知新聞」十一月二十六日の記事では、華族女學校卒業生で組織している同窓会の一つである蛭雪會員の某子爵夫人に取材している。夫人は「昨年改革の時に卒業生の内でも檄文さへ飛ばして下田先生の排斥を試みられ且前に関

係した方々の處に寄々会合された事さへあつた」と述べている。卒業生が、今までの先生が変わつてしまつて、學校へ行つても他人の學校のようで悲しいというので、「下田さんの処置を悪く云ふたのです。之は其當時罷免になつた先生や親しい生徒が父兄に迫つて行つた仕事だったが不結果でした」と語っている。また自分たちは前世紀の教育を受けたが、娘たちは新しい先生が新知識を授けてくださるのだから結構だとのべ、改革による變化を好意的に受け止めている。

## 平民新聞

新聞紙上最も激しく歌子を中傷し攻撃したのは日刊「平民新聞」である。日刊「平民新聞」の全身は週刊「平民新聞」で、平民社から明治三十六年（一九〇三）十一月十五日に創刊され、同三十八年一月二十九日第六十四号で発禁、廃刊となつた。幸徳秋水と堺俊彦が発行した週刊誌で、日本における最初の社会主義運動の機関紙である。日露戦争に対し非戦論の立場をとり、愛国教育を批判したことから厳しい弾圧を受け、『共産党宣言』の翻訳を掲載したため発禁処分を受けた。その後再建された平民社から明治四十年（一九〇七）一月十五日に社会党の機関紙日刊「平民新

聞」を創刊した。発行兼編集人は石川三四郎、印刷人は深尾韶である。編集部には幸徳秋水、石川三四郎、荒畑寒村、森近運平、山川均、小川芋銭等十四名がいて記事を書いた。

『妖婦下田歌子』は、編集部の一人である深尾韶（一八八〇—一九六三）によって書かれた。深尾韶の平民社退社後の状況や没年については『もうひとりの明治社会主義 深尾韶の生涯』（市原正恵著）によって明らかにされている。深尾韶は静岡市に生まれ、週刊「平民新聞」に「松前地方窮民の状態」を書き送り注目された。二十六歳の時に堺利彦に師事し、堺が由文社を設立すると入社し、「家庭雑誌」の編集を手伝った。

日刊「平民新聞」が廃刊になると、深尾は土方久元を会長とする斯道会に書記として務めた。明治四十年には結核になり、やがて病氣を理由に社会党を離れ郷里の静岡に帰った。静岡で少年の育成のための少年軍団設立に没頭してゆく。少年軍団は日本におけるボーイスカウトの前身である。少年軍団は少年団として組織は年々拡大し、大正九（一九二〇）年には市内の団員数は一三二七名となった。大正十一（一九二二）年四月に少年団日本連盟が正式に結成された。歌子は、静岡での少年団設立に注目していた。少年団があって少女団がないことを残念に思い、帝国少女団の構想を持ったが、実現することはなかった。<sup>注</sup> 歌子は、

深尾が日刊「平民新聞」で自分を中傷する記事を書いた人物とは思ってもいなかったのではないか。

市原正恵氏は『妖婦下田歌子』はブルジョアジイの生體をあばいたものとしている。鶴見俊輔は「下田歌子という磁石にひきよせられて、明治の元勳がオール・スター・キャストで出てくる。このゴシップの作者は、下田歌子個人を中傷したいという意図をこえて、幕府打倒の革命運動の精神をうらぎって、権力の座にすわってからはお手もりで自分たちを貴族にしてしまった明治の功臣たち全体の虚人性をあばこうとしたものだろう。これは、勲章をおびた人々が次から次へと出てくるレビュー形式のヴァラエティー・ショーである。女主人公の下田歌子は、舞台まわしの役にすぎないが、彼女の役割は虚業としての教育、虚人としての教育者を考えさせる。」と述べている。日刊「平民新聞」の記事は必ずしも歌子のみを攻撃したものではない。しかし歌子にとって、彼女に関わった政界の人物やその夫人にまで醜聞の種として書かれることは耐え難いものがあったと想像する。深尾が少年軍団設立に没頭する様子は、『妖婦下田歌子』を毎日執筆していた彼の姿と重なるように思える。手段はともかく、当時の政界の人々の腐敗と墮落をゴシップ記事に書くことで、深尾は信念をとおそうとしたのだろうか。



## 辭職の決断

歌子は辭職を決断した時のことを『余が辭職の顛末』で述べている。

然るに、昨四十年十月十五日、余は、内親王殿下の御事に就き、具申すべき件ありて、田中宮相を訪づれ、用件終りて、既に坐を立たんとせし時、宮相曰く、卿、本日は別に急ぐ用務無き乎と。余曰く、今朝は急ぐに及ばずと。然らば、少しく徐ろに咄したき事あり。こは、決して、宮相としてに非ず、友人としてなり。卿、決して余が言に憤る事勿れと。余答へて、何事かは存じ申さず候へ共、小官は決して、濫りに憤ることはせじ。御心置き無く、談り給はんこと本意ならめと。爰に於いて宮相口を開きて曰く、扱昨年の改革には非常の盡力をなされたる以後、女學部の事も、着々として改善進歩を見る、誠に悦ぶべきの結果なり。然るに世間の事には、稍もすれば心と違ふ事少なからず、乃木院長は、何分にも卿を知らず。何か投書などのありしとて、心を痛め居れり。然しそれも過ぎ去りて、今は何事をも聞かねども、余が愚按には、十分の信用無き長官のもとに、長く留らんことはいかがならん。却つ

て今事無きの秋、所謂功成り名を遂げて身退くの途を取られん事こそ安全の策ならめと。

余は此言を聞きて、心中宮相が去年改革を敢てせしめたる時の言と相違することを甚だしきを思ひ、頗る不快の感無き能はずと雖も、かかる長官のもとには、實に長く居る可らざるなりと、胸中咄嗟の間に分別定まりたれば、

歌子が辭職の時期を田中宮相に尋ねると、一日も早いほうがよい、年末が最も好時期という返答があった。田中宮相は長官である乃木を信用できないといい、改革も軌道に乗ったのだから辭任したほうが歌子のためという。この発言は一年前と異なると思い、歌子は田中という人物に不快の感情を持った。咄嗟の間に分別が定まったとあり、この瞬間に辭表を提出することを決心したとある。歌子の辭職の噂は十一月には広まっていた。十一月中旬から歌子と乃木との間に面談などが行われた。田中宮相は最初から歌子を矢面に立たせて改革に当たらせ、軌道に乗ったら辭任させる心積りがあったのだろうか。歌子が辭職の後の後任人事も、十月以前には決まっていたのではないかと思われる。次の機会に辭表提出前後の歌子の行動について述べたい。また歌子に対する批判の原因についても述べたいと考



えている。

最後に、手記『余が辞職の顛末』は下田歌子関係資料に所蔵されていない。太平洋戦争の時に渋谷は空襲にあり、実践女子学園は焼夷弾の直撃を受けた。学内の備品や書籍などのほとんどは消失した。翌日学校の様子を見に来た教員によれば、図書館には多くの書籍があったので、最後まで燃えていたと語った。国文学者の金子元臣は、学校ならば安全と思い、蔵書を学園に運んでいたので、すべてを灰にしてしまったという。歌子の没後に姪の平尾寿子が校長に就任するが、短期間で辞任した。校長室等にあった下田歌子関係の資料―草稿、書簡、短冊等は、箱詰めになされて校舎の地下に移された。この資料は地下にあったため消化活動で水にぬれてしまったが、消失を免れた。戦後に職員が地下に置いてあった物品と一緒に歌子の資料の入った箱を、処分のため運び出した。箱は三箱あったというが、図書館職員が中を調べた時にはすでに二箱処分されていたという。『余が辞職の顛末』は処分された箱の中にあったのだろう。この件は、当時のやむを得ない事情でなされたことではあったが、下田歌子関係資料を担当していた司書は、職員批判につながると考えたのか公にすることなく亡くなった。当時の関係者はすでに故人となつていると思われ、

あえてこの事情を記させていただいた。

注 拙著『下田歌子の少女教育―幻の帝国少女団―(一)』実践国文科会 平成二五年七月 (「りんどう」第38号)、『下

田歌子の少女教育―幻の帝国少女団―その二』実践国文科会 平成二六年七月 (「りんどう」第39号)

## 参考文献

故下田校長先生傳記編纂所編『下田歌子先生傳』故下田校

長先生傳記編纂所 昭和十八年十月

女子學習院編『女子學習院五十年史』女子學習院 昭和

十一年十二月

鷺峰會編『羽田貞義先生追悼録』田中末吉(印刷) 昭和

十九年三月

兵庫縣御影師範学校同窓義會編纂『兵庫縣御影師範学校創

立六十周年記念誌』兵庫縣御影師範学校同窓義會 昭和

十一年十月

谷川健一・鶴見俊介・村上一郎責任編集『虚人列伝』学芸

書林 昭和四十四年七月 (ドキュメント日本人9)

深澤茂俊著『追弔会追悼談で語られた校祖友國晴子―教職

員、教え子らの友國への思い』神戸親和女子大学福祉

臨床学科 二〇一八年三月 (「福祉臨床学科紀要」一五)

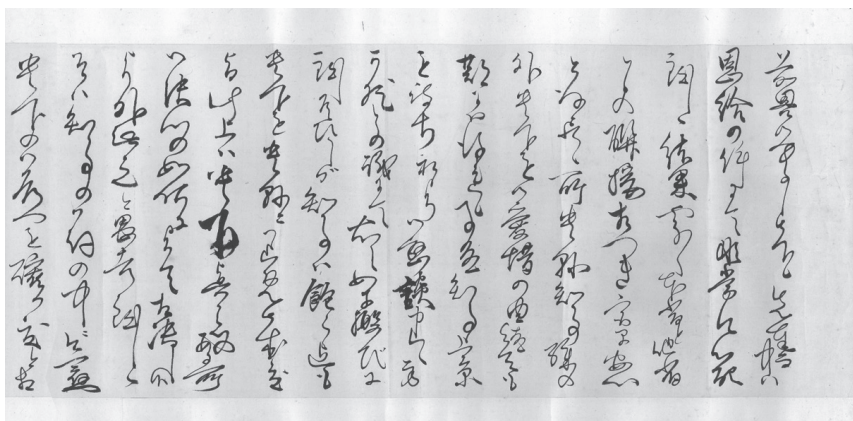
市原正恵著 『もうひとりの明治社会主義者 深尾韶の生涯』

思想の科学社 一九七七年五月 「思想の科学」 第六  
次七五号）

加藤善夫著 『静岡三人組 深尾韶・原子基・渡辺政太郎のこ  
と』 思想の科学社 一九七八年八月—一九七八年九月

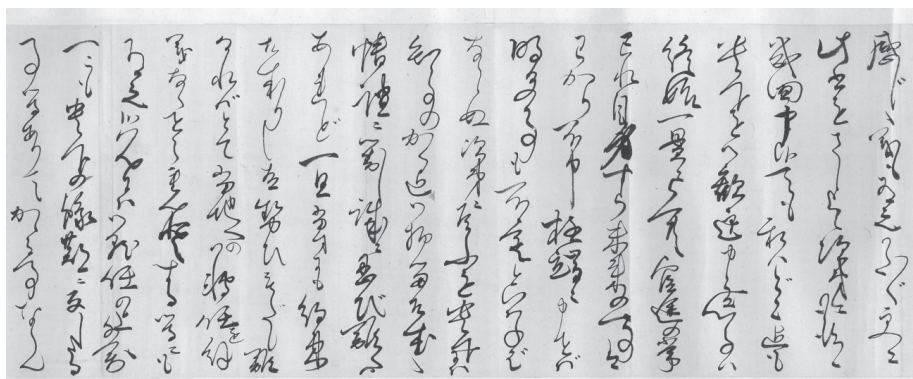
「思想の科学」 第六次九四—九六号）

（おおい みよこ・実践女子大学文芸資料研究所  
客員研究員）



図版 和田豊宛書簡

1/4



2/4

